

山田業広 医案③

往年、池田茂三郎といへるものの妻、脹満を患ふ。諸医、攻下理気治虻等種々治するに困苦甚し。其人肝気甚しき性質ゆへ、夜間不眠等の諸症蜂起す。余に診を乞ふ。

余病人に謂て云く。本病は逆モ全治すまじ。先ず肝気を治すべしとて、抑肝散を与るに、病苦大いに減ず。続いて用ること百日余、腹満半を減ず。其の後は自若たれども病苦愈えたるを以て休薬し、少し心持あしきときは、例の持薬を貰いたしと云て、前方を与ること常例になりたり。後二十許年を経て他病にて歿しぬ。由是觀之、脹満に拘るは非なり。凡そ卒中風・労瘵・臑膈の中、脹満ばかりは十に六五を救べき歟と思はる。徐靈胎も「臑膈同じく極大の病なり、然るに臑を治すべし而して膈治さらず」といへり。此の言実に然り。